

人はみな歌い、踊る

Vol.17

横井雅子

# 今どきの匠たちの工房から

ツインバロムを作るための道具は漆料なものばかり

photo : 田中多佳子

よこい まさこ  
横井 雅子

音楽研究家。国立音楽大学准教授。

音楽そのものを調べるだけでなく、

音楽と人びとがどう関わって生きているのかに興味があります。

その向き合い方の違いに驚かされたり、感じ入ったり。



ドゥダを吹いてみせるベシエ・ポトンド

photo : 田中多佳子

前号で取り上げたロンドン訪問の前にハンガリーのブダペストで楽器職人たちを訪ねた。知り合いのハーディガーディ製作者と初めて会う二人の比較的若い職人だ。ハーディガーディを作る知人は他で文章にしたことがあるので、初対面の二人について書こうと思う。

二人はいずれも三〇代前半で、この世界ではもちろん若手なのだ。今まで私がハンガリーで会った楽器職人たちとはずいぶん異なる印象の人たちだった。

最初に訪れたのはバグパイプのドゥダを作っているベシエ・ポトンド。彼に会ってまず驚かされたのは、マンシヨンの一室でドゥダ作りをしているということだった。今どきマンシヨンを工房にすること自体はさほど珍しくはないが、なにぶんドゥダは高音響を発する楽器だ。小さいながらも独立した作業場でもあるかと思っていたので、いささか拍子抜けした。話をきくと、彼には音楽的バックグラウンドがまったくなく、専門学校では皮工芸を学び、その道で専門職として

独り立ちしたキャリアの持ち主で、これもありなり予想外だった。言うまでもなくバグパイプには空気を溜める皮袋がついているので、共通点があるといえるはあるし、祖父が木工用の道具をひと揃い持っていて幼い頃から木工にも親しんでいたことも有利に働いたのは理解できるが、特に音楽と関わりのない若者がそれだけで(さほどピッチャーでもない)ドゥダを作ろうとはなかなか考えないものだ。ロックばかりを聴いていたという彼は二〇歳の時にドゥダと運命的な出会いを果たして、そこから新たに楽器作りと演奏を民俗音楽の専門学校で学んだのだそうだ。

こうした楽器に物心ついた頃から触れてきた世代ならともかく、都会で育った人が伝統楽器を演奏しようとか作ろうと思いつく場合は、たいてい民俗的なものに強い関

心を抱いて深入りするケースが多いものだが、どれだけ聞き返しても、「運命だったと思うから」とか、「ドゥダ作りに必要な技術は持っていたからね」とあつさり繰り返すばかりなので、なんだか釈然としない感じが残る。そもそも彼の作った楽器を見て最初からなんとなく違和感があったのは、ドゥダに典型的な白っぽい裏皮の皮袋でなく、どれもこれも濃い茶色の表皮の袋だったからなのだが、それも、「今はこういう方が受ける」との答え。こままでくると、その皮袋いっばいに空気を溜めながら運指の練習をするのは困難なので、運指用のバグパイプ・シンセサイザーを使って教えるときいても、「なるほど」と思ってしまう。

次に訪問したのは、ハンガリーの音楽史を彩ってきたツインバロムの職人だ。ハンガリーはクラシック音楽にもツインバロムが使われるというお国がらだが、かつて訪れたことのあるコズモス社というツインバロム工房は四年前に無くなっていた。ジプシー楽団の演奏者の多くが愛用するボ

ハークという職人の流れを汲む工房だったのだが、今はそれだけでは成り立たないらしい。ピアノの輸入・販売と修理を手がける会社の一部門として吸収されていた。ここでヴァーチ・バラージュで、ツインバロムだけでなく、ピアノの修理も行っている。フェルトを巻いた樺で金属弦を打つツインバロムは発音原理の上ではピアノと同じで、実際の楽器もグランドピアノの中をのぞいているような感じだ。製作や修理ではこの二つの楽器は技術的に共通性が多いということ、彼はどちらも手がけている。

音楽技術者養成の専門学校で学んでいたという彼も、ベシエ同様、なにか強い動機があつて今の専門を選んだというわけではなかった。ただピアノに取り組みより面白そうだったし、弟子入りした先生がすばらし

かつたからねと言ふ。彼が師事した人物は確かにハンガリーのツインバロム弾きが絶大な信頼を寄せていた名人だったから、その点では幸運だったといえるだろう。弟子入りしてからマイスターの称号を獲得するまでに十三年かかっているのが、現代としては決して短くはない道のりだ。しかし、今やツインバロムだけ扱っていられる時代でないのも事実だ。「面白そうだった」という動機でこの楽器と取り組もうと決意する若者が出てきただけでも有難いのもかもしれない。

コヴァーチが属する会社はハンガリーでスタインウェイピアノの総代理店も兼ねていた。彼が作業する工房と道をはさんだ向かい側にはエレガントなピアノ・サロンがしっかりとえられている。しかし、こどもも今どきの現実を目にすることとなった。この同じ会社は、スタインウェイよりはるかに多くの中国製のピアノを輸入しているのだ。エレガントなサロンの方ではなく、コヴァーチが作業する雑然とした工房の一角には、箱詰めの中

国ピアノがびっしりと並べられていた。ひところ、日本製ピアノが世界市場を席巻していたことがあつたが、日本のピアノはここでは今や影もない。

異なる二つの楽器を扱う若手職人たちが、出自も現在の環境も特に共通しているわけではないのだが、なにかと感覚と時代の移り変わりを感ぜさせられる訪問だった。

バグパイプ・シンセサイザーの本体、これに指穴つきの管の一部をつないで練習する



photo : 横井雅子



ベシエ・ポトンドの自宅に並ぶバグパイプのドゥダ